

# 古フランス語における付加形容詞の位置と韻律上の特徴について\*)

Position de l'adjectif épithète à l'égard du nom  
et ses caractéristiques prosodiques en ancien français

今田良信

IMADA Yoshinobu

## 0. はじめに

### 0. 1. 古フランス語における付加形容詞 (A) と名詞 (N) の語順に関する記述

現代フランス語ではNA語順が原則的であるのに対して、古フランス語ではAN語順が原則的であると一般的には言われているが、後者に関する主要な文法書、等の記述を詳しく調べてみると、おおよそ次の4つに纏められるように思われる。

(1) AN語順が概ね一般的ないし原則的であるという趣旨の記述がなされているもの

Anglade(1928), p. 264; Raynaud de Lage(1975), p. 39; 島岡(1982), p. 223;

Kibler(1984), p. 65; Ménard(1988), p. 118; Bonnard & Régnier(1989), p. 194

(2) 形容詞の位置は全く決まっていなかったとするもの

Rickard(1989), p. 54

(3) AN語順・NA語順どちらが一般的ないし原則的なのか、はっきり述べていないもの

Moignet(1979) [後述], Jensen(1990), Buridant(2000)

(4) 付加形容詞の位置について特に触れていないもの

Faral(1941), Einhorn(1974), Foulet(1980), Hasenohr(1993), Joly(1998),

Revol(2000)

### 0. 2. Moignet(1979) の記述の再検証

筆者は、拙論(2015)において、Moignet(1979), p. 345に見られる古フランス語のAとNの語順についての記述の再検討を行なった。この検証を行なおうとした主たる理由は、ここでは数量的な例証と共に記述が行なわれているにも関わらず、付加形容詞の前置例と後置例それぞれについての「出現事例の延べ用例総数 (=生起例(token<sup>1)</sup>))」と「形容詞別の異なり語数 (=型(type<sup>1</sup>))」の正確な数値およびその対比について何も触れられていなかったからである。名詞に対する付加形容詞の前置・後置の何れが一般的あるいは原則的であるのかが問題となっているのに、なぜ「出現事例の延べ用例総数」と「形容詞別異なり語数」を網羅的に数え、対比してみないのであろうかという根本的な疑問が湧いたのである。

[表1] M.A. (1-25節) + Q.G. (1-9頁) 付加形容詞用例数

	前置例		後置例	
形 容 詞 別 延 べ 用 例 数	—		anglesches	1
	biaus	19	—	
	blans	2	—	
	bons	7	—	
	—		crestiens	1
	derriens	2	—	
	—		destres	2
	<u>droiz</u>	1	<u>droiz</u>	1
	<u>estranges</u>	1	<u>estranges</u>	1
	fols	2	—	
	<u>granz</u>	49	<u>granz</u>	1
	gentiz	4	—	
	hauz	10	—	
	lointains	1	—	
	<u>merveilleux</u>	2	<u>merveilleux</u>	1
	mestre	1	—	
	—		morteus	1
	<u>noviax</u>	3	<u>noviaus(noviax)</u>	4
	—		oscurz	1
	—		perilleux	4
—		precios	1	
—		prochains	1	
—		reonz	9	
riches	4	—		
sainz(seinz)	6	—		
—		sauvajes	1	
—		senestres	1	
—		vermeils(vermeiz)	6	
vieuz	1	—		
計	異なり語17種	115	異なり語17種	37

限られた範囲であるが、Moignet(1979), p. 345に示されたテキストの範囲に合わせて、M.A.(: *La Mort le roi Artu*) の1-25節、およびQ.G.(: *La Queste del saint Graal*) の1-9頁に現れる、単独の付加形容詞の原級についてのみ、改めて筆者が用例数を数え直し、一緒にして纏めたものが〔表1〕<sup>2)</sup>(=今田(2015)における〔表3〕)である。

この表によれば、前置例の延べ用例数は115例、後置例の延べ用例数は37例であるから、それらを合わせた延べ用例総数152例の百分率で見ると、前置例は約76%、後置例は約24%を占め、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の3倍強ということになる。一方、形容詞別の異なり語数の点から見ると、前置例の形容詞は17種、後置例の形容詞も同じく17種であり、そのうち両者の間でゆれているものが5種ある。百分率で見ると、形容詞の異なり語総数は29(=17+17-5)種となり、前置例も後置例も約59%で、前置例と後置例がゆれて出現するものが約17%ということになる。

### 0. 3. 今田(2015)における再検証の結果

拙論(2015)で得られた検証結果に基づけば、AN語順が一般的ないし原則的であるというのは、延べ用例総数(token)に基づく付加形容詞の出現頻度の観点から見た場合に限り、形容詞別の異なり語数(type)の観点から見れば、一般的とか原則的とは言えないということになる。

#### 1. 付加形容詞の位置と特徴

そこで、本稿では、次の段階の考察として、前置例と後置例をめぐる、付加形容詞自体やその置かれた環境に関する特徴がどうなっているのかについて考えてみたい。

例えば、韻律上の観点から見てみるなら、単純に、①付加形容詞自体の音節数ごとの用例数が、延べ用例総数(token)と形容詞別異なり語数(type)それぞれについて、前置例と後置例の間でどのような分布になっているのか、あるいは、②付加形容詞自体の長さ(音節数)の平均値が、前置例と後置例の間でどのようなになっているのか、そしてその平均値に、延べ用例総数と形容詞別異なり語数とで、どのような差が見られるのか、などが考えられよう。また、付加形容詞の置かれた環境については、③テキスト上の実際の事例の集積としての、形容詞と名詞の長さの関係が、前置例と後置例とでどのような平均値の数値を示しているのか、というようなことも興味深い。

さらに、韻律上の観点だけでなく、意味的な観点や、個別形容詞の出現頻度の観点からの考察も必要かもしれないが、今回は、韻律上の観点からの上記①～③について検討することにしたい。

## 2. 分析の前提：古フランス語における音節数

先ず、古フランス語の発音、音節について、Raynaud de Lage(1975<sup>9</sup>), p.12 によれば、「12世紀ないし13世紀の発音をそのまま再生することは不可能である。しかし、その主要な諸特徴を知らなくてはならない。そして術学的な気取りのない類似的な音をもって読もうと試みることはできる。」〔中略〕古フランス語は綴りがほぼ音に対応するという意味において、十分に表記された言語であり、近代フランス語よりも十分に表記されている。

〔中略〕従って、原則として、すべての文字が発音される。」(大高訳)〔下線部筆者〕と述べられている。そこで、本稿では便宜的に、このRaynaud de Lage(1975<sup>9</sup>), pp.12-14に見られる説明を参考に音節数をカウントすることにする。

## 3. 分析

### 3. 1. 韻律上の観点から見た付加形容詞自体の分析

#### 3. 1. 1. 音節数ごとの前置・後置別用例数の分布

先ず、〔表1〕に基づいて、すなわち、便宜的に形容詞の語形を単数・主格・男性形に統一して、音節数ごとに付加形容詞自体の用例数が、延べ用例総数についてどのような分布になっているのかを示したものが、〔表2-1〕である。

〔表2-1〕延べ用例総数に関する音節数別の形容詞事例数分布

	前置例	後置例	合計
1音節	97例(84%)[90%]	11例(30%)[10%]	108例[100%]
2音節	15例(13%)[47%]	17例(46%)[53%]	32例[100%]
3音節	3例(3%)[25%]	9例(24%)[75%]	12例[100%]
合計	115例(100%)	37例(100%)	152例

この表によれば、縦列の関係については、前置例では、1音節の形容詞が用例全体の84%と圧倒的に多く、2音節になると全体の13%と格段に減少し、3音節に至っては3%とさらに本の僅かとなっている。一方、後置例では、一番多いのは2音節の形容詞であるが、それでも全体の5割に至らず46%で、次が1音節のもので全体の30%、最後の3音節のも

のでも全体の4分の1弱で24%と1音節のものとそれほど変わらないものの、2音節以上の形容詞が全体の70%を占めている点は、前置例の場合（16%）とは対照的である。

また、横列の関係については、音節数ごとの前置例・後置例の分布が、1音節語では前置例の方が90%で圧倒的、2音節語では両者が47%と53%で拮抗し、3音節語では後置例の方が75%でかなり優勢という状況になっている。

従って、語の長さ（音節数）の点で、短い形容詞は前置される傾向が強く、長い形容詞は後置される傾向が強いということはいえよう。

次に、〔表2-1〕と同様に、便宜的に形容詞の語形を単数・主格・男性形に統一して、音節数ごとに付加形容詞自体の用例数が、今度は形容詞別異なり語数についてどのような分布になっているのかを示したものが、〔表2-2〕である。

〔表2-2〕異なり語数に関する音節数別の形容詞事例数分布

	前置例	後置例	合計
1音節	9例（53%）[75%]	3例（18%）[25%]	12例 [100%]
2音節	6例（35%）[43%]	8例（47%）[57%]	14例 [100%]
3音節	2例（12%）[25%]	6例（35%）[75%]	8例 [100%]
合計	17例（100%）	17例（100%）	34例

形容詞別異なり語数については、用例総数自体が34例と少ないため、また〔表2-1〕の場合と同じく、形容詞の音節数が便宜的でもあるため、精度についてはあまり問題にできないものの、それでも、縦列の関係については、前置例では、1音節のものが1番多く（53%）、音節数が増すにつれて用例数も少なくなる傾向にある（2音節が35%、3音節が12%）。後置例では、前置例のように反比例的ではないが、一応1音節のものが1番少なく（18%）、続いて3音節（35%）、2音節（47%）の順で多くなっている。

また、横列の関係については、合計数は前置例と後置例が共に17例で同数なのであるが、音節数ごとの前置例・後置例の分布は、1音節語では前置例が優勢で、2音節語では両者がほぼ50%前後になっており、3音節語では後置例が優勢という状況に一応なっている。

従って、前置例と後置例の合計数がそれぞれ同数（17例）の異なり語数の場合であって

も、語の長さ（音節数）の点で短い形容詞が前置され、長い形容詞が後置される傾向がある程度見て取れるということになる。

### 3. 1. 2. 前置・後置別付加形容詞の長さ（音節数）の平均値

さらに、付加形容詞自体の長さ（音節数）の平均値が、前置例と後置例の間でどのような値になっているのかを、延べ用例総数と形容詞別異なり語数について、まとめて1つの表にしたものが、〔表3〕である。この表に示した各平均値は、前節3. 1. 1. の場合と同じく便宜上の理由から、単数・主格・男性に語形を統一しているため、実際のテキストで得られる数値の下限を示すものと考えられたい。

〔表3〕延べ用例総数・異なり語数に関する形容詞の音節数平均値

	前置例平均値	後置例平均値
延べ用例総数	1.18 音節	1.97 音節
	+0.79	
	^ +0.41      ^ +0.21	
異なり語数	1.59 音節	2.18 音節
	+0.59	

〔表1〕で、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の3倍強であったのに対し、形容詞別異なり語数の点から見ると、前置例も後置例も同数であったことを念頭に置いて、〔表3〕を見てみると、延べ用例総数の場合、前置例平均値は1.18音節で1音節に近く、後置例平均値は1.97音節で2音節に近くて、その開きは0.79と異なり語数の場合（0.59）よりも大きい。異なり語数の場合は、延べ用例総数の場合よりも前置例平均値は1.59音節と数値が0.41上回り、後置例平均値は2.18音節と数値が0.21上回っており、上回り幅は後置例平均値が前置例平均値の半分程度であるが、平均値の数値自体は2.18と2音節を越えている。従って、いずれにせよここでも、語の長さ（音節数）の点で、前置される形容詞の方が、後置される形容詞よりも短い（後置される形容詞の方が、前置される形容詞よりも長い）という傾向が強いことは支持されていると言えよう。

### 3. 2. 韻律上の観点から見た形容詞と名詞の長さの関係

そこで最後に、形容詞とその被修飾語である名詞との長さの関係はどのような分布を示

しているのかを、これは当然ながら、延べ用例総数についてのみ示したものが〔表4〕である。この分布は、〔表1〕に示した延べ用例総数（前置例115例、後置例37例）について、テキスト上の個々の用例の形容詞と名詞の音節数を1つ1つカウントして得られた平均値を示しているので、必然的に〔表3〕の数値とは異なることを断っておきたい。すなわち、〔表3〕の延べ用例総数の場合と比べて、〔表4〕の形容詞の音節数平均値の方が、前置例で0.13（=1.31-1.18）音節、後置例で0.41（=2.38-1.97）音節長いが、これは〔表3〕の平均値が単数・主格・男性形に統一され、実際に得られる数値の下限である点が影響していると考えられる。

〔表4〕延べ用例総数に関する形容詞と名詞の音節数平均値の関係

	形容詞前置例（115例）	形容詞後置例（37例）
延べ用例総数	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">形容詞</div> <span style="margin: 0 10px;">—</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">名詞</div> </div>	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">名詞</div> <span style="margin: 0 10px;">—</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;">形容詞</div> </div>
音節数平均値	1.31音節 < 2.10音節 = 2.16音節 < 2.38音節 ↑ +0.79	2.16音節 < 2.38音節 +0.22 ↑
	————— < +1.07 —————	

〔表4〕によれば、形容詞前置例の場合は、名詞の平均値が2.10音節であるのに対して形容詞の平均値が1.31音節で、形容詞の方が名詞よりも0.79音節短く、形容詞後置例の場合は、名詞の平均値が2.16音節であるのに対して形容詞の平均値が2.38音節で、形容詞の方が名詞よりも0.22音節長いという結果となった。名詞の方の音節数平均値は、別々にカウントされたものであるにも関わらず、形容詞の前置例（2.10音節）でも後置例（2.16音節）でも、非常に近似している。一方、形容詞の方の音節数平均値は、前置例と後置例とで（〔表3〕では0.79音節であったが）1.07音節と1音節以上の開きを見せている。

従って、この節でも、前置される形容詞は名詞よりも短く、後置される形容詞は名詞よりも長い傾向があるという点は揺るがないことが分かった。

なお、前置されているのに形容詞の方が名詞より長い事例は、115例中11例（用例全体の9.6%）であり、後置されているのに形容詞の方が名詞より短い事例は、37例中7例（用例全体の18.9%）であった。

#### 4. 本稿の結論と今後の課題

以上、韻律上の観点から、古フランス語における付加形容詞の位置と特徴について、分析・検討を行った。資料の範囲が狭いので、まだ1つの目安以上の精度は持たないかもしれないが、どの視点の分析からも浮かび上がってきたのは、語の長さ（音節数）の点で、名詞より短い形容詞は前置される傾向が強く、名詞より長い形容詞は後置される傾向が強い（〔表4〕参照）、あるいは、前置される形容詞の方が、後置される形容詞よりも短い（後置される形容詞の方が、前置される形容詞よりも長い）（〔表2-1〕,〔表2-2〕,〔表3〕参照）傾向が一貫して見られるということである。

このことは、佐藤、他(1991), pp. 95-96の記述と対比してみると興味深い。すなわち、ほぼ17世紀にNA語順が一般的な原則となってしまうと、AN語順を取る場合は何らかの理由に基づいたものとなり、その1つに「単音節の形容詞は多音節の名詞の前」という音調上の理由」が挙げられるという趣旨の指摘があるが、これは、考えてみると、NA語順が原則となって後のAN語順を取る理由の1つである。一方、本稿で得られた結果は、まだAN語順が原則とされる古フランス語における話であるので、これは取りも直さず、古フランス語の時期に、上述の「単音節の形容詞は多音節の名詞の前に」という傾向の、言わば、先駆期的な段階として「語の長さ（音節数）の点で、名詞より短い形容詞は前置される傾向が強く、名詞より長い形容詞は後置される傾向が強い」という段階が既にあったのではないかと推定させる結果であるということである。

今後、資料の範囲を広げること、韻律上以外の観点からの分析にも努めたい。

#### 注

\*) 本稿は、日本ロマンス語学会第53回大会（東京外国語大学、2015年5月24日（日））における口頭発表をもとに、加筆・修正を施したものである。

1) Dubois et al. (1973), p. 500によれば、英語の用語としてtype/token「型／生起例」の項目があり、「テキストの延べ用例数(token) に対する異なり語数(type)の比を「型／生起例 (type/token)」(「生起例」分の「型」) 比率と呼ぶ」(拙訳)と説明されている。

2) 〔表1〕は、M.A.とQ.G.の用例数を合わせたものなので、M.A., Q.G.それぞれ個別の場合とは異なり、下線を付した形容詞も同一資料内において前置と後置との間でゆれの見られたものとは限らないことに注意されたい。前置例、後置例に分けて、形容詞別に用例の出現作品を示せば、次の通り。前置例：droiz[M.A.], estranges[Q.G.], granz[M.A., Q.G.], merueilleux[Q.G.], noviax[Q.G.];後置例：droiz[M.A.], estranges



[M.A.], granz[Q.G.], merveilleux[Q.G.], noviaus(noviaux)[M.A., Q.G.]。

#### 参考資料

- M.A.: *La Mort le roi Artu*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris: Droz/Minard, 1964. [現代語訳: *La mort du roi Arthur*, traduit par M. Santucci, Paris: Honoré Champion, 1991. ]
- Q.G.: *La Queste del saint Graal*, Roman du XIII<sup>e</sup> siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1980<sup>2</sup>. [現代語訳: *La Queste du Saint Graal*, traduite par E. Baumgartner, Paris: Honoré Champion, 1979. ]

#### 参考文献

- 今田良信(2009): 「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a): 「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」, 『ニダバ』, 39, pp.31-40.
- 今田良信(2010b): 「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」, 『ロマンス語研究』, 43, pp.21-30.
- 今田良信(2011): 「日本語・フランス語の諸相対照研究 — フランス語の特色を中心として —」, 『ニダバ』, 40, pp.10-19.
- 今田良信(2012a): 「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの —」, 『ニダバ』, 41, pp.117-126.
- 今田良信(2012b): 「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」, 『ロマンス語研究』, 45, pp.21-30.
- 今田良信(2013a): 「フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用」, 『ニダバ』, 42, pp.30-39.
- 今田良信(2013b): 「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見えてくるもの —」, 『ロマンス語研究』, 46, pp.77-86.
- 今田良信(2014): 「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順に関する考察 — 文法書記述の疑問点, 矛盾点に着目して —」, 『ニダバ』, 43, pp.21-30.
- 今田良信(2015): 「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順について — 延べ用例総数と形容詞別異なり語数の対比による文法書記述の再検証 —」, 『ロマンス語研究』, 48, pp.1-10.

- 佐藤房吉, 他(1991): 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 島岡茂(1982): 『古フランス語文法』, 大学書林.
- Anglade, J. (1928<sup>3</sup>): *Grammaire élémentaire de l'ancien français*, Paris: Armand Colin.
- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite Grammaire de l'ancien français*, Paris: Magnard.
- Buridant, C. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Dubois, J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.  
 [福井芳男, 他編訳(1980): 『ラールース言語学用語辞典』, 大修館書店]
- Einhorn, E. (1974): *Old French: A Concise Handbook*, London: Cambridge University Press.
- Faral, Ed. (1941): *Petite grammaire de l'ancien français*, Paris: Hachette.
- Foulet, L. (1980<sup>3</sup>): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris: Champion.
- Hasenohr, G. (1993<sup>2</sup>): *Introduction à l'ancien français de Guy Raynaud de Lage*, Paris: SEDES.
- Jensen, F. (1990): *Old French and Comparative Gallo-Romance Syntax*, Tübingen: Max Niemeyer.
- Joly, G. (1998): *Précis d'ancien français*, Paris: Armand Colin.
- Kibler, W. W. (1984): *An Introduction to Old French*, New York: The Modern Language Association of America.
- Ménard, Ph. (1988<sup>3</sup>): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Moignet, G. (1979<sup>2</sup>): *Grammaire de l'ancien français: Morphologie - Syntaxe*, Paris: Klincksieck.
- Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDES.
- Raynaud de Lage, G. (1975<sup>9</sup>): *Introduction à l'ancien français*, Paris: SEDES.  
 [大高順雄訳編(1981): 『古フランス語入門』, 朝日出版社]
- Revol, T. (2000): *Introduction à l'ancien français*, Paris: Nathan.
- Rickard, P. (1989<sup>2</sup>): *A History of the French Language*, London: Unwin Hyman.  
 [伊藤忠夫・高橋秀雄訳(1995): 『フランス語を学ぶ人のために』, 世界思想社]
- Wartburg, W. von (1971<sup>2</sup>): *Evolution et structure de la langue française*, Berne: Francke.